

“友好のまち”へ 沖縄県本部町

もとぶ ちよう

小郡市と沖縄県本部町は、“友好のまち”締結に向けての機運が高まっています。小郡市は本部町とどのような関わりがあるか知っていますか？

「太陽と海と緑」 観光文化のまち本部町

沖縄本島の北西部に位置する本部町は、西に東シナ海を望み、東に雄大な自然の営みを感じさせるカルスト地形が広がっています。また、八重岳など美しい景観や恵まれた自然環境に育まれ、時代の移り変わりとともに発展してきました。本部町には、年間400万人以上の観光客が訪れます。海洋博記念公園や美ら海水族館に代表される観光施設や、備瀬のフクギ並木など見所はつきません。

また、特産品も多く、初夏を告げるカツオや、真夏の太陽を連想させる真っ赤なアセローラ、タンカン、カープチー、近年は特にパインアップル、シークワサーなど、1年を通して旬のものが溢れています。

青少年交流の始まり

1981年、旧小郡青年会議所が「第1回小郡・三井地区少年の船」を企画し、沖縄県本部青年会議所が受け入れを決めたことから両団体の交流が始まりました。以降、36年にわたり継続している青少年交流事業（小郡・三井少年の船）では、沖縄県本部町を必ず訪問しており、その交流が続いています。

この事業には、市民有志や、事業に賛同した企業や市役所などから、ボランティアスタッフとして多数参加しています。

そして「少年の船」の参加者・スタッフが本部町へ訪れた人数は延べ5,361人（大刀洗町と旧北野町を含む）に及びます。



第1回「小郡・三井地区少年の船」

1988年には、旧本部青年会議所と旧小郡青年会議所が姉妹青年会議所締結を行いました。さらに2013年には、本部町商工会青年部と旧小郡青年会議所が協力協定を締結し、互いの市町のイベントに出店するなど、団体間での交流が続いています。



本部町

瀬底島

水納島

名護市

那覇市



37年間続いている子どもたちの交流

“友好のまち”へ

これまで続けられてきた民間団体間での交流を、さらに市民町民に広げ、都市交流へ発展させていくために、小郡市と本部町は「友好のまち」締結に向けて取組を進めています。

今年2月16日に、本部町の高良文雄町長が小郡市を訪れ、「友好のまち」締結の意向確認と意見交換を行いました。

また、7月22・23日には加地市長が本部町を訪問し、「友好のまち」締結に向けて締結内容や締結式などについて協議を行いました。

この協議の中で、今年度中に「友好のまち」締結をすることを約束しています。

両首長のコメント

小郡市と本部町の交流は、1981年に当時の小郡青年会議所主催の「少年の船」の一行が本町を訪れ、本町の青年会議所が受け入れたことが始まりであります。

以降、36年もの長きにわたる交流を途絶えることなく続けてこられた両団体には、心から敬意を表します。児童交流から始まった取組は、両団体の人事交流、さらには特産品の販売など、経済面まで拡大しており、活発化しております。このような中で、「友好のまち」締結への機運も高まっております。

今後は、両市町の絆をより一層深めるとともに、幅広い分野での交流を続け、誇りある郷土の発展を願い、「友好のまち」締結に向けて、加地良光市長と協議を重ねてまいります。

小郡市民の皆様、機会がありましたらどうぞ本部町までめんそーれー（お越しください）。

本部町長

高良 文雄
たから るみお

小郡市長

加地 良光

交流の始まりー

武田 孝さん



当時、私は小郡青年会議所の理事長だった。青少年育成委員長の池末美光氏が少年の船を立案し、その受け入れ先を検討する中で、何のつてもなかった本部青年会議所を訪れた。同会議所には他にも多くの受け入れ依頼があっていたが、熱心に依頼したところ、「では、一生のお付き合いをしてくれるか」と問いかかれ、それを約束し、交流が始まった。

その約束どおり現在も交流は続いている。

出港の際に、子どもたちが親に見送られてテープを授ける姿は感動的だった。本部は当時渇水だったが、現地に着くと大雨が降り、「子どもたちが雨を運んできてくれた」と町長は大喜び。子どもたちは、びしょ濡れになりながらもパレードに参加して、大歓迎されたことが印象深い。

写真：崎本部ビーチ

- 1 2 本部町の景色
- 3 アセローラ
- 4 八重岳のさくら
- 5 タンカン
- 6 塩川
- 7 カツオ漁の様子
- 8 シークワサー
- 9 美ら海水族館
- 10 備瀬のフクギ並木
- 11 闘牛の様子
- 12 パインアップル
- 13 瀬底大橋

